

---

# 朝比奈みくるの存在の環

v a r a n a s i

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

朝比奈みくるの存在の環

### 【Nコード】

N2166I

### 【作者名】

varanasi

### 【あらすじ】

涼宮ハルヒの憂鬱のSSです。

タイムマシーンを使った古くからのネタの『存在の環』を使った話です。

初投稿なので、誤字脱字等が有りましたが、お許しください。それでは、楽しんでいただけたらうれしいです。

「パパ、ごめんなさい」

こんにちは、朝比奈みくるです。実はわたし、今年の誕生日のプレゼントに、パパから貰った真珠のネックレスを、こっちの時代で無くしちゃったみたいなんです。

アンティーク品なんだけど、小振りの真珠のネックレスで受け部分に天子の羽がついていて、とってもかわいいデザインのネックレスで、とっても気に入っていたのに・・・

それに、前の持ち主もみくるさんだったようで、真珠の受けのところに『A・m i k u r u』って、彫ってあったんです。

涼宮さんやキョン君たちSOS団のみんなも探してくれたんだけど、結局見つからなかったの。

もうショックで、ショックで今日は一日落ち込んでいたのだけど、夕方に涼宮さんが、

「みくるちゃん、そんなに落ち込まないのっ、落ち込んだって見つからないわよ。そういう時は、1週間くらい経ってからもう一度探すのよ。そうすれば案外簡単に見つかるものよ。」

そういつて慰めてくれました。

そして、  
「そうだ、みくるちゃんを元氣付けるために、今日の夕方から夜桜の会を開催するわよ。場所は鶴屋山ね。」

そういつて、キョンくんを連れて買出しにいつてしまいました。

鶴屋さんの了解も得ないまま、場所を決めるなんて涼宮さんらしいなと思いましたが、あたしを元氣付けようとしてくれている気持ちに嬉しくて、なんかまた涙が出そうになりました。ありがとう涼宮さん。

1時間後くらいかな、涼宮さんたちは戻って来ました。

「じゃあ、ちゃっっちゃといくわよ!」

そう言つて、涼宮さんはズンズン進んで行きます。わたしはみんなが出て行つた部屋で、手早く着替えて1階の下駄箱のところまで合流しました。

夜桜の会には、団員全員と、鶴屋さん、谷口君、国木田君も来ていて、とつても盛り上つて、私の中の悲しい気持ちも、いつの間にか1/3くらいに減っていました。

ライトに照らされる桜の花は、そよそよと風になびいていて、なんだか寂しげで、切ない雰囲気がありました。

まあ、そんな木の下では酔っ払つたキヨンくんが谷口君に説教をしたり、涼宮さんが谷口君を投げ飛ばしたりして、せつかくの雰囲気が出たけれど。お酒を飲むとあの二人は手がつけれられないんですよね。詳しくは、禁則事項です。

そろそろ、夜中に近い時間となり、お酒もお弁当も無くなり、会は終了となりました。

帰りは、キヨンちゃんと涼宮さんが家まで送ってくれました。二人とも、さすがにアルコールが抜けて正気を取り戻していました

けど、飲みすぎで頭が痛いみたい。大丈夫かな？

おしゃべりをしていると、あつという間に到着。

今日は本当にありがとう。お休みなさい。涼宮さん、キヨンくん。

「二人とも、まっすぐ家に帰るんですよ！」

と、ちよつとお姉さんぽく振舞うと、二人はなぜか顔を赤くしていました。

何でかな？ ふふふつ。

カードキーをかざして、マンションのエントランスに入り、郵便受けに入っている広告をゴミ箱へ。

エレベーターで8階まで上がり、右に3つ目の扉がわたしのおうちの玄関です。

「ただいま。」

玄関で靴を脱ぎ、下駄箱の上のセンサーに手を当てて、部屋に入るのがいつものわたしの習慣。

リビングの扉を開けると、おいしそうなおいが部屋中に充満していました。

ママがキッチンでパパの夕食の準備をしているみたい。

「帰るのが遅くなっちゃった。ゴメンね。」

「お帰り。今日も遅くまでご苦労様。ご飯は食べてきたのよね？」  
えーっと、紹介します。ママです。

わたしが言うのもなんだけど、とってもやさしくて、きれいなママなんです。

それに、二人で歩いていたら、姉妹に間違えられることもよくあるほど、とっても若く見えるわたしの自慢のママなの。

わたしの家族は4人家族。パパにママ、そして4つ年上のお兄ちゃんがいます。

でも、お兄ちゃんは、遠くの学校に通っているので、今は家を離れているので3人で暮らしています。

パパは時空管理局の仕事をしていて、帰ってくるのがいつも遅いんです。

そうそう、言い忘れていたのだけど、ここは涼宮さんたちのいる21世紀ではないの。玄関を入れてセキュリティーを抜けたら、私の時代に自動的に転送される仕組みになっています。

それに、あの時代に6時間いたら、6時間後に。10時間いたら10時間後に戻れるようになってるの。詳しいことは禁則事項ですけど。

家に帰ると、まずお風呂に入って、部屋着に着替えてから管理局に今日一日のことを報告して夕食をいただくのが、わたしのいつもの日課。今日はお花見でお外でいただいた来ちゃったから、食べないけど・・・

もちろん、わたしが21世紀に行ってることは家族のみんなが知ってます。

詳しい話は家族の前で出来ないけど。いつもわたしのことを心配してくれている。

迷惑ばかりかけているので、早く恩返しができる日が来ればいいな。あつ、パパが帰ってきたみたい。パパは、わたしの上司の上司の・・・えーっと、とにかくかなり偉い人なんです。

だからわたしもいつかパパみたいになりたいって、いつつも思っています。

パパが夕食をとっているときに、とても言いづらかったけど、ネックレスを無くしたことを話しました。

するとパパは、「形あるものはいつかは壊れるし、無くなることもあるさ。」って言ってあつさりと許してくれたの。

本当にゴメンね。パパ。

それにしても、パパがネックレスを買ってくれたのは、初めてだよね。いつつ、まだ早いつて言つて、買ってくれたこと無いのに・・・つて、パパに聞いてみた。

パパが恥ずかしそうに教えてくれたところによると、半年前に、庭に木を植えようと穴を掘っていたら、缶に入ったあのネックレスが出てきたんだつて。

測定してみると、その缶はなんと21世紀のもので持ち主も見つからないから、パパが頂戴してショップできれいにしてもらったらしいのです。

もう、娘へのプレゼントを拾ったもので代用しないでよ。わたしすつごく嬉しかったのに・・・

「そうそう、これがネックレスが入っていた缶だよ」

ご飯を食べ終わったパパが、リビングでソリビジョンを見ていた私に錆びた缶を見せてくれた。

これつて、これつて・・・これつてえ〜。

「・・・ひよつひよええええ〜」

わたし、思い出しました！ 昨日、体育祭の振り替え休日で学校が休みだったので、涼宮さんたちと鶴屋山にマツタケ探しをしていたときに、服を汚しちゃつて、汚れを落とすのに無くしちゃいけないからつて、キョンくんから貰った小物缶に入れたんだつた。その後、

・・・そうだそのまま、置き忘れてきちゃったんだ。

じゃあ、今取りに帰ったら見つかる・・・けど・・・もしかしてこれって規定事項なの・・・かな・・・

パパに相談してみると、やっぱり規定事項だったみたい。

・・・あれっ？ でも、これって・・・

「みくる、気付いたか？」

パパが意味ありげにわたしに聞いてくる。

やっぱりそうなんだ！

「えーっと何って言うんだっけこれって・・・」

「ふふっ、これが存在の輪ってやつだよ。」

監視員の応用編で勉強したんだけど、よく判らなかつた存在の環。

パパが教えてくれたところによると、こういうことらしい。

？パパは、タイムカプセルとなった缶の中から、ネックレスを見つけた。

？そのネックレスは私がもらい、21世紀へ持っていき、なくしてしまった。

？それをパパが見つける。

？そのネックレスを『禁則事項』年後、パパが・・・の繰り返し。

そう、このネックレスは誰が作ったわけでもなく、壊れて消滅する事もなく、一定の時期に存在しているもの。

存在がループして、そこにあり続けるもの。

閉ざされた品・・・

過去にもそういったものの存在が確認されていて、そのすべてが歴史上の重要アイテムになっているの・・・

私の名前入りのネックレスも、そのレアアイテムに仲間入りしてしまいました。

みんなに自慢したいけど、禁則事項ど真ん中なので、管理局と家族だけの秘密。

ふいっ。それにしても今日はなんか疲れました。

明日は日曜日。駅前には9時集合で、SOS団の皆で釣りに行くことになっていきます。

「キヤッチ&イートの精神で釣りをするわよ。食べきれないほど釣って釣りまくって、焼いて食べて余ったら、干物にしてお土産にたくさんもって帰りましょう。わたしにかかれば、鯨を釣るのだって、さして難しいことではないわ。それに、鯨を捕まえたら、みくるちゃんのコルセットを作ってあげるわ。ギュッとウエストの細いやつ。楽しみにしててね、みくるちゃん！」

って涼宮さんは言ってたけど、一応お弁当を作っていこう。もし釣れなかったらみんなお腹が空いて困るもんね。

そうだ、さっきママが作っていたおかずを入れさせてもらおう。

それと涼宮さん。鯨さんがかわいそうなのでコルセットは遠慮しておきますね。それと、あの時代でも鯨は絶滅危種じゃなかったかな？

さて、明日も朝が早いし、そろそろ眠ることにします。

お休みなさい。またあした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2166i/>

---

朝比奈みくるの存在の環

2010年10月18日10時04分発行